



阿波藍商人が伝えた狸文化：大阪・木更津への伝播をめぐって

その他のタイトル	A Folk-Geographic Approach to Propagation of Tanuki (Japanese Raccoon) Culture from Awa to Osaka and Kisarazu
著者	田中 優生
雑誌名	史泉
巻	118
ページ	A16-A35
発行年	2013-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023652

阿波藍商人が伝えた狸文化

—大阪・木更津への伝播をめぐって—

田 中 優 生

I. はじめに

タヌキは「豸（けものへん）」に「里」と書くように、人と近い関係を持つ動物である。しかし、「狸」がもともと中国ではヤマネコを中心とした中型哺乳類の総称であったことはあまり知られていない。中国からやってきた狸という概念が日本でタヌキに定着する過程は、現在に影響を与えるほど極めて複雑である⁽¹⁾。そして、狸はさまざまな要因によって、日本独自の文化を形成していくこととなる。本稿の目的は、日本における狸と関係する文化をとりあげ、その要因を整理して地域を考察することである。

狸の研究は主に民俗学でみられ、代表的な研究者としては中村禎里がいる。東京都立大学理学部卒業の中村は、研究分野を生物学から科学史、科学社会学、歴史民俗学へと移行していった。中村の動物変身譚と日本人の動物観に関心を持って進められた狸に関する研究は、本稿を書くうえで非常に参考となった。

地理学で動物を扱った代表的な研究者としては千葉徳爾と高橋春成があげられるが、狸を中心に取り扱ったものはない。また、千葉の人獣交渉史⁽²⁾、野生動物と野生化家畜をとりあげた高橋の研究⁽³⁾は、ともに人間活動と動物の関わりに着目したものであり、地域に着目した本稿とは差異が生じる。

中村はタヌキのイメージを構成するいくつかの要素として、①動物そのものの習性と形態、②古くから人びとのあいだで恐れられていた荒ぶる山神の動物態としての理解、③里の人から見た異域の人びと（特に山民と山の宗教者）、④里の人自身の心理状態の投影をあげている⁽⁴⁾。本稿では、とりわけ③の異界の要素に注目する。

異界とは、自分たちの生活している環境や既知の領域に対して、そうでない、包含関係にない地域のことを指す。付き合いの少ない人びとの住居や見知らぬ人々の住む異郷や、未知の部分が多い山や森、死後の世界などが異界とされる⁽⁵⁾。また、人間の異界への関心のありようで、生者と死者、人間と神や妖怪、自分の属する集団とそれ以外といったさまざまな関係が表象されることとなる。このことから、狸と異界の関係性を考えていくうえで、人や地域を多角的にみることのできる地理学の手法が必要不可欠だといえる。

阿波と大阪は江戸時代、人や経済、文化などを通じて盛んな交流が展開していた⁽⁶⁾。本稿では、阿波と大阪に木更津を加えた藍商人が関係する3つの地域に着目することで、狸と異界の関係性を明らかにしていく。

異界の類義語として“アジール”という言葉がある。アジールとはもともとフランス語で、自然に存在する山や森などの世俗から遮断された世界（聖域）や、奴隷や犯罪者などの避難所を表わした場所の概念である⁽⁷⁾。このアジールにみられる、人によって現実世界と区別される、または人が逃避することのできる場所という考えが、本稿の中の“異界”という言葉に含まれていることを明記しておきたい。

調査方法としては、狸の民話や伝承を記した二次資料を分析・解釈、数多くの事例などに共通する事項をもとに狸文化の要因を整理する。さらに、筆者のフィールドワークで得た情報を合わせ、狸文化が根付いた地域について総合的に考察していく。

最後に、狸と狐の違いについて触れておきたい。山田奨治は、狸の怪異・妖怪事例が狐に比べて動物分布との関連性が薄いことから、「みえる狐」に対して「みえない狸」と表現している⁽⁸⁾。この分布ではわからない狸の隠された部分に迫っていきたい。

II. 狸文化の概要

(1) 狸文化

狸文化とは筆者の造語である。狸と関係する伝説や民話・信仰などは、ある地域における自然的要因に人為的要因が合わさることによって誕生する。この人為的要因には、地域の外からやってきた概念やモノ、ヒトと、それらによって新たにつくられた環境（異界）が当てはまる。狸文化とは、狸と関係する文化とその形成要因、さらには地域自体をも内包する意味合いを持つ用語である（図1）。

(2) 外からみた日本の狸文化

タヌキ（ホンダヌキ）は学名を *Nyctereutes procyonoides viverrinus* という。本来タヌキの生

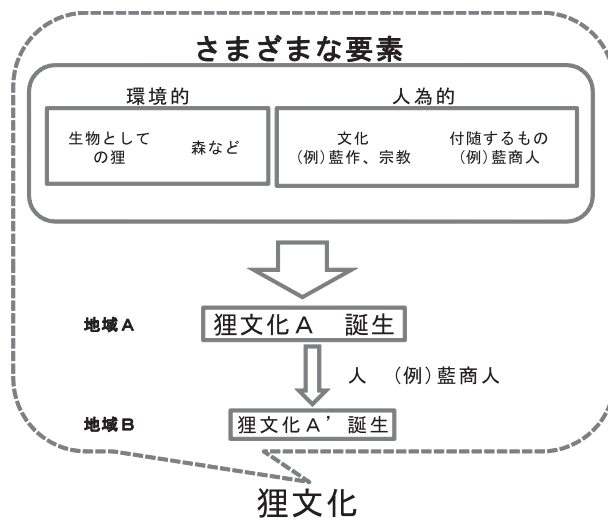


図1 狸文化の誕生過程

息地は日本を含む東アジアであるが、ヨーロッパにも移入されている。そこで、ヨーロッパと東アジアを代表して中国の狸文化をみていきたい。

ヨーロッパでの狸のイメージは「不器用。天気を予言する者。穴熊（貪欲）と同様。」であるが、中国では「月に属する陰の動物で超自然力。いたずら。わるふざけ。」として狸はとらえられている⁽⁹⁾。ヨーロッパはタヌキが移入された動物であるため、アナグマとよく混同されている。これは中国から“狸”という概念を輸入した日本においてもあてはまる⁽¹⁰⁾。一方、中国ではタヌキは月に関係する動物であるという。タヌキは夜行性であり、そこから月と結び付いたと考えられる。日本でも、月とタヌキが描かれた絵や証城寺しょうじょうじのたぬきばやしなどの歌にその片鱗がみられるが⁽¹¹⁾、これは中国からの影響だといえる。また、夜は異界としてとらえられ、そこから百鬼夜行や妖怪は誕生した。タヌキが妖怪に含まれるのも夜行性が要因と思われる。

他にも、日本には信楽の焼き物や狸信仰をはじめとした狸を祀る、飾る文化があるが、これは日本独自のものである。というのも、他国ではいたずらなど、狸に対してあまり良いイメージは持たれていない。日本においては、憑きもの信仰や稲荷信仰、言霊信仰などと結び付いた結果、そういった文化が根付いたのである。

(3) たぬきのイメージ

言語生活を営む場は自然風土や社会・文化面で地域差があり、これがことば（特に語彙）の面に反映していることがあるという⁽¹²⁾。中村は中古から17世紀の書物を用いて、概念の変遷を考察している⁽¹³⁾が、イメージや言葉の意味合い、ひろがりを大きな地域の中でみていくうえでは、方言のほうが適している。そこで、この節では日本において狸文化がどのようなひろがりを持ったのかを狸の方言名⁽¹⁴⁾から考えていきたい。

表1によると、狸は「狸」「猫」「貉」という漢字がよく使われている⁽¹⁵⁾。貉はタヌキ、アナグマのことを指し、猫はイノシシのことをいう。「まみだのき」や「まみむじな」から、これらの動物たちが混同されていたことがわかる。また、生物系、数字系、妖怪系といったいくつかの系統が方言の中に混在する。

まず、生物系としては「穴」に関係するものが多い⁽¹⁶⁾。これはタヌキが穴を棲みかとするからである。タヌキとアナグマは外見が似通っていること、そして同じ穴のムジナという言葉があるようにアナグマの掘った穴をタヌキが利用するため、両者は混同されてきた。また、肉に臭みがあることに由来する「くさい」や毛皮の良い狸を指す「くそだぬき」から獲物という面もみえてくる。「こけ」はこけるから“こけにする（ばかにする）”へも繋がると推定される。数字系は本稿のIV章でも触れるが、八は狸の名称としてもよく使われている。また、「だんざ」や「ばんぶく」は伝説や民話の影響だと考えられる。妖怪系では、人を指す言葉を用いているのがすべて大分県である。

以上のことから、他の動物との混同や狩猟、見下しなどが方言名から垣間見えるが、この表1の中で注目したいのは、「ころふけ」と「よもの」である。「ころふけ」と同地域には「ころふける」という方言が存在する。この言葉は、交尾期になって発情するという意味合いを持っている

表1 狸の方言名一覧

番号	方言名	原型	系統	貉	穴熊	狐	地域	文献		補足
								原資料(成立年)	編著者	
1	あなっほ [穴っこ]		セ	×	×	×	紀州	『本草綱目啓蒙』(1803)	小野蘭山	⇒あなっこ(穴っこ)。穴に住む狸の一種。他に、穴、堀など。
2	あなほり [穴掘]		セ	×	○	×	駿州	『本草綱目啓蒙』(1803)	小野蘭山	穴熊や狸の類。他に、きつつきなど。
3	おたの			×	×	×	香川県高松市・仲多度郡	『香川県方言辞典』(1976)	近石泰秋	
4	おっさん	おじ (伯父)	ヨ	×	×	×	大分市	『豊後方言集』(1933~34)	大分県立第一高等女学校国文会	
5	かいねほり		セ	×	×	×	長門 周防	『両国本尊』(1737) 『両国本尊』(1737)	田智庵貫通 田智庵貫通	垣根(家の周りなどの意)か。
6	くさい [臭]		セ	×	○	×	青森県	『野辺地方言集』(1936)	中市謙三	肉に臭みのあるところから。
								『教育適用南方方言集』(1905)	築瀬栄	
							岩手県	『九戸郡志』(1936)	岩手県教育会九戸郡部会	
								『船越村ヲ中心トセル発音ノ誤リ方言訛語』(1931)	下閉伊郡船越尋常小学校	
7	こけ		セ	×	×	×	富山県下新川郡	『入善区域方言集』(1917)	入善区域教育研究会	こける。こけにすると関係するのかわ。
8	だんざ		ス	×	×	×	鹿児島県	『方言』(1931~37)		佐渡のムジナ伝説の団三郎と関係があるのかわ。
9	とんちぼ	とんちぼー	—	—	—	—	新潟県佐渡	『新潟県方言集・佐渡編』(1974)	渡辺富美男	とんちぼーは忌み言葉。貉も忌み言葉で、(とん・とんちぼ)ともいう。他に、貉の子もさす。佐渡のみ。
10	とんちぼー		○	×	×	×	新潟県佐渡	『佐渡方言集』(1909)	矢田求	
11	はちむじ	はちむじな	ス	—	—	—	岐阜県飛騨	『飛騨のことば』(1959)	土田吉左衛門	老狸。
12	はちむじな [八貉]		ス	×	×	×	富山県東礪波郡	『城端町史』(1959)	町史編纂委員会	
13	はちもんじ	はちむじな	ス	—	—	—	奈良県吉野郡	『十津川の民俗』(1961)	平山敏治部・林宏・岩井宏実・高取正男	
14	ばんぶく			×	×	×	—	—	—	
15	ばんぶく	ばんぶく	—	—	—	—	長野県北安曇郡	『小谷口碑集』(1922)	小池直太郎	「万福」か、または「ぶんぶくちやがま(分福茶釜)」の転か。
16	ひちむじな	はちむじな	ス	—	—	—	富山県東礪波郡	『城端町史』(1959)	町史編纂委員会	
17	ぼーず	ぼー(坊)	ヨ	×	×	○	大分県大分市・大分郡	『豊後方言集』(1933~34)	大分県立第一高等女学校国文会	僧をはじめ、人のことをさす。
18	ぼんさん	ぼー(坊)	ヨ	—	—	—	大分県速見郡	『豊後方言集』(1933~34)	大分県立第一高等女学校国文会	
19	ほんむじな [本貉]			×	×	×	山形県西置賜郡	『山形県方言辞典』(1970)	山形県方言研究会	
20	まみ [猫]			×	○	×	常陸	『新編常陸国誌』(1836~55)	中山信名	狸の一種。他に、穴熊、貂。
							伊豆	『伊豆国産物帳』(1736)	—	
							福島県南会津郡	『尾瀬と絵枝岐』(1943)	川崎隆章	
							山形県豊浦郡	『長門方言集』(1937)	重本多喜津	
21	まみだのき [一狸]	まみ	—	—	—	—	徳島県那賀郡	『阿波木頭民俗誌』(1958)	近畿民俗学会	
22	まみむじな [一貉]	まみ	—	—	—	—	栃木県栃木市・安蘇郡	『栃木県方言辞典』(1983)	森下喜一	
23	まめだ			○	×	×	大阪府大阪市	『大阪方言事典』(1955)	牧村史陽	大阪府大阪市、大阪府泉北郡、兵庫県の小さい狸(豆だぬき)のことをさす。
							大阪府泉北郡	『和泉郷莊村方言』(1935)	南要	
								『方言』(1931~37)		
							兵庫県	『播磨加古郡北部方言記録』(1972)	中島信太郎	
								『淡路方言研究』(1934)	田中万兵衛	
							奈良県	『大和方言集』(1951)	新藤正雄	
							徳島県	『阿波言葉の辞典』(1960)	金沢治	
24	むじな [貉]			×	×	×	山形県村上・最上	『山形県方言辞典』(1970)	山形県方言研究会	山形県村上・最上は、野生のものをさす。他に、腹黒い人など。
							栃木県	『栃木県方言辞典』(1983)	森下喜一	
							群馬県邑楽郡	『上州館林町方言集』(1931)	宮本勢助	
							富山県高岡市	『伏木地方の方言集』(1954)	田口俵太郎・克敏	
							静岡県磐田郡	『水窪方言の基礎調査』(1960)	山口幸洋	
25	よもの [夜物]		ヨ	×	×	○	福井県	『若越方言集』(1902)	福田太郎	「夜に活動するもの」の意。狐や狸の類。他に、狐、鼠、妖怪など。
26	くそだぬき [糞狸]		セ	×	×	×	徳島県那賀郡	『阿波木頭民俗誌』(1958)	近畿民俗学会	毛皮のよい狸。
27	しばおり			×	×	△	予州	『物品識名』(1809拾遺1825)	水谷豊文・岡林清達	頭部がやせて狐の頭に似ている狸。
28	ころふけ			×	×	○	長野県佐久	『東信濃方言集』(1976)	上原邦一	年を経た狐や狸など。⇒ころける「動」

系統 セ…生物系、ス…数字系、ヨ…妖怪系
 5~7段は辞書に記載の有無を表している。
 (小学図書編『日本方言大辞典』、小学館、1989をもとに筆者作成)

る。その結果、いわゆる女の商売などへと狸は繋がっているのではないだろうか。

タヌキが日本ではさまざまなとらえ方をされ、日本で独自の地域文化を生み出してきた。そして、イメージからもみえてきた“異界”との関係性がこれ以降も重要となってくる。それらのことをふまえつつ、本稿の狸文化の出発地であり、日本独自の狸信仰が発展した阿波からまずはみていきたい。

Ⅲ. 阿 波

(1) 四国の狸事情

四国は日本の中でも、民話や伝説をはじめとした狸文化が数多く存在している地域である。しかし、タヌキの数が他に比べて特別に多いわけではない。四国で狸文化が隆盛した原因は「キツネの棲まない国」といわれるほど、キツネの数が少ないという相対的要因からであった。

キツネの地域における絶滅要因としては、地形や都市化、農業、狩猟などがあげられる。雑食で都市化などによる環境変化によく適応するタヌキに比べ、キツネはそれらの変化の影響を特に受けやすいといわれている。四国の場合は、本州と海で隔てられたことによりもともとキツネの生息数が少なかったことに加え、自然災害や都市化などによってさらに数を減少させたという、環境的要因と人為的要因の両方が重なりあったものだと考えられる。

四国では、キツネが棲まない理由としていくつかの説が存在する。一つは、弘法大師によって、将来くろがねの橋ができるまでこの地に棲むなと封じられたという説である。二つ目は、伊予の河野通義によって追い出されたという説である。また高松では、浄願寺の禿狸と岡山の古狐が化けくらべをし、負けたのでこの地に棲むのをやめたという説が伝わっている⁽¹⁷⁾。

キツネが相対的に少ない四国であったが、ここ四半世紀は増加傾向にある。環境庁自然保護局生物多様性センターの「第6回自然環境保全基礎調査」をみると、2003年のキツネの生息区画は1978年の調査よりも拡大している。同調査のタヌキと比べても、生息時期などが関係するかもしれないが、その差は歴然としている⁽¹⁸⁾。キツネの生息区画が四国にまで広がりを持った理由としては、本州と四国が橋⁽¹⁹⁾によって結ばれたこともあげられる⁽²⁰⁾。まさに前述した弘法大師の説の現代版である。また、この説によって古くから地理的要因とキツネは関係していると考えられていたことがわかる。

弘法大師の説は、狐との関係性からみても非常に興味深い説である。というのも、弘法大師と狐の伝承は日本各地にあり、稲荷信仰とも密接な関係にある。しかし、キツネが少ない四国ではその関係が崩れる。狐のかわりに結びついたもの、それが狸なのである。

四国の中でも、阿波の狸にまつわる伝承の伝播や狸信仰の流行には、修験者が深くかかわっているといわれている⁽²¹⁾。また、伝播の仕方が稲荷信仰の狐の例と類似していることから推察できるように、キツネの少ない四国では、よく並び称されるタヌキがキツネの代替をしたのである。

以上のことから、四国の狸文化にはキツネが相対的に数が少ないという自然的な条件を背景

に、人によって伝承が創られ脚色されていったといえる。

(2) 阿波の狸文化と金長狸の伝説

狸文化が多く残る四国の中でも、阿波は狸を祀る祠がもっとも多く存在する地域であり⁽²²⁾、その伝説や民話にも祠が登場する。今回は数多くある中から、小松島市に残る金長狸の伝説について若干の考察を試みる。

この伝説は、江戸時代末期（天保年間の頃）、勝浦郡小松島町大字日開野の染物屋「大和屋」の主人・茂右衛門に、金長という狸が命を助けられたことから始まる。金長はその恩に報いるために大和屋の職人である万吉に憑き、守り神となって店を大いに繁盛させた。喜んだ茂右衛門は屋敷内に立派な祠をつくった。数年後、金長は四国の狸の総大将である津田浦の六兵衛狸と「阿波狸合戦」とよばれる戦いをし、討ちとったものの致命傷をうけてしまう。茂右衛門に別れを告げようと日開野に戻ってきた金長は、助けてもらった礼をいうと息を引きとり、彼の生き様に感激した茂右衛門は、正一位金長大明神として長く祀ったという⁽²³⁾。

この金長を主人公にして、1939（昭和14）年には「阿波狸合戦」という映画が新興キネマによって制作された。また、映画会社の社長や俳優たちの寄進によって、金長神社本宮が創建される。現在、日峰山のふもとには「金長神社」が存在するが、これは1956（昭和31）年に再映画化されたのちに建てられたものであり、芸能上達、商売繁盛の神として祀られている。小松島市のまちづくりにも利用されており、アニメ映画「平成狸合戦ぽんぽこ」⁽²⁴⁾にも登場した。

中村は、津田浦の六兵衛狸と小松島の金長の戦いが修験内部での紛争をモデルとしているのではないかと推察している⁽²⁵⁾が、私は二つの港間での商売上の争いがもとになったと考えている。というのも、津田（現在は徳島市）は江戸時代以来、藍などの特産品の積出港として栄えており⁽²⁶⁾、一方の小松島も江戸時代に入ってから急速に発展した商業港であったので、商業上の衝突が起こっても不思議でない。

小松島には播磨屋や野上屋、鹿島屋、島屋、阿波屋など、多くの藍商人たちが軒を連ねており、阿波藍の4分の1を扱ったといわれている。港として繁栄したのも、17世紀後半に相次いで行われていた藍商人たちによる関東進出の動きが契機となったからである。これらの藍商人たちと狸文化の結びつきについては次で述べたいと思う。

(3) 阿波藍と藍商人

金長狸の伝説には茂右衛門という染物屋が登場するが、彼は実在の人物であり、明治維新の頃までは染物屋の裏庭に祠が存在していたといわれている。金長狸の伝説では、狸が憑いたことによって店が繁盛したとされている。染物屋の繁栄理由を探るために、阿波藍と藍商人について考える。

藍はタデ科の一年草で、近世の阿波を代表する特産物である。1585（天正13）年に徳島藩初代藩主・横須賀家政が播磨国竜野から阿波に移封した際に、播磨の飾磨付近の藍を呉島郷（現・麻植郡鴨島町）に移植したのが起源だといわれているが⁽²⁷⁾、15世紀半ばにはすでに阿波で藍栽

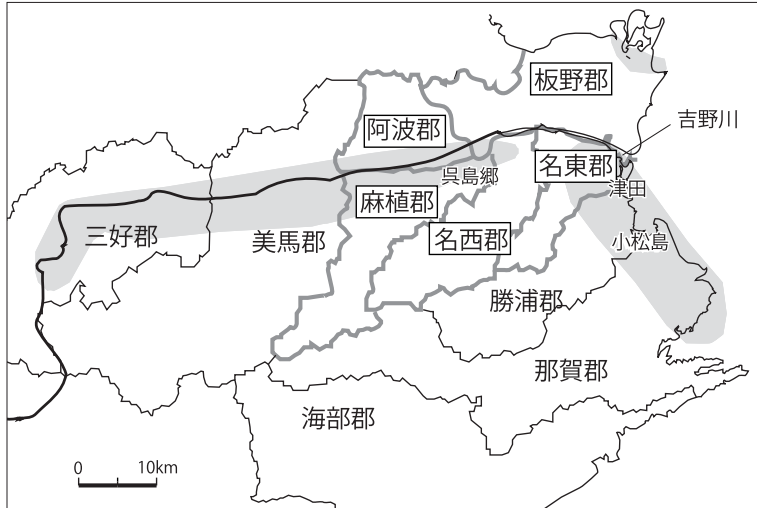


図2 北方五郡

□で囲っている地名が北方五郡

■は狸伝承集中地域

(前掲²¹⁾、平凡社地方資料センター編『徳島県の地名 日本歴史地名大系 37』、平凡社、2000の「徳島県(旧郡域・現郡市町村域対照図)」及び「徳島県のおもな自然地名と道筋〈付四国霊場八十八ヵ所札所〉」をもとに筆者作成)

培が広まっていたと考えられている⁽²⁸⁾。

藍の主産地は吉野川の中・下流域に位置する板野郡・名東郡・名西郡・麻植郡・阿波郡の北方五郡である(図2)。これらの地域は吉野川沿岸の氾濫原地帯で自然堤防の発達が顕著である。吉野川は四国第一の大河であり、よく発達した自然堤防上の微高地に灌漑することはかなり困難で、水田造成も難しかった⁽²⁹⁾。しかし、藍栽培には気候や土壌などの自然環境が適していた。

阿波藍が本格的にこの地域で展開していくのは、近世に入ってからである。その大きな理由の一つは、中世末期から江戸初期にかけて、衣服が麻から綿へ変化したことにある。木綿は麻に比べて保湿性や耐久性に優れ、染料である藍との相性も良かった。そして、国内での木綿栽培の普及・綿織物の一般庶民への浸透によって大量生産が可能であったため、近世初期には畿内農村を中心に、瀬戸内地方など各地に普及していき、藍の生産にも大きな影響を与えた。徳島藩による保護・奨励策によって、藍作は明治中期に最盛期を迎えることとなる。その後は人工染料の普及で激減した。

金長狸の伝説は、木綿栽培の普及とともに急速に発展していった藩内の藍染屋に対して、疑問を持った人々が人ならざる者のしわざ、狸が憑いたと考えたことによって誕生したという仮説を筆者は持っている。つまり、阿波の自然環境を背景にして根付いた藍と狸という二つの文化が結び付いた結果、金長狸の伝説は誕生したのである。

さて、阿波藍は生産技術の改良などによって品質が向上し、生産高も増え、全国の市場を独占。藍染料の全国的普及とともに、染料の薬や藍玉を販売する藍商人たちも各地へ進出していくことになる。彼らが海を通じて外の世界へ出ていく動きにより、阿波の狸文化も伝播していった

と考えられる。それがまた新たな狸文化を誕生させる要因となっていく。

以下の章で筆者は、阿波の藍商人が進出した大阪と千葉県の本更津という二つの地域を取りあげ、それぞれに根付いた狸文化について考察していきたいと思う。

IV. 大 阪

(1) 天下の台所・大坂と阿波の商人の動向

近世の大坂は、淀川デルタに形成された河港の商業都市である。「天下の台所」といわれるように、日本各地からさまざまな商品が集まる蝸集地であり、また商品とともに多くの人が移り住んだ場所でもある。

「天下の台所」の素地は、豊臣秀吉の時代までさかのぼる。秀吉はまず、東横堀川と西横堀川ではさまれた地域に、計画的な街区として船場を建設した。そして、生玉や玉造、渡辺などの上町台地を中心とした大坂とよばれる地域やまだ陸化まもない船場などに、商人を移住させて城下の経営を図った。西横堀川以西の下船場地域には、阿波や土佐から来た商人たちが群居し、阿波座と土佐座が誕生した。その他にも堺や平野から商人が移住し、大坂は商業都市として基盤が形成されていく。

大坂の陣（1614～15）以降、多くの運河を開削することにより水上交通網が整備され、沿岸には新しい市街地が続々と造成されていった。安治川口には、大坂・江戸間を往復した菱垣廻船や樽廻船、北前船をはじめとする諸国の貨物輸送船舶が集まり、瀬戸内の海運と結び付くことになって、大坂は全国物資流通の中心ともなったのである。

さて、安治川や木津川の出入口であり、河口の商業地として発展した現在の西区⁽³⁰⁾には阿波藍商人が問屋街を形成していた⁽³¹⁾。そのため、1626（寛永3）年には彼らが出資して旧立売堀川に阿波橋がかけられている。他にも「いたちぼり」という名前の由来には阿波座の阿波屋西村太郎助家が所有していた敷地を割り売りしたため、断売掘、または居断掘の地名ができたという説もある。大坂の狸文化の形成においては阿波の商人たちの存在が非常に重要な要素となってくるのである。

(2) 阿波から伝播した狸祠

大阪の狸文化を考察していくうえで注目すべき地域が大きく分けて2つある。鬼内仙次は狸話が多い地域として、難波、福島、野田、森の宮、阿倍野、曾根崎、新町から阿波座にかけてと高津神社から東へ寺町にかけてとをあげ、そのなかでも特に多い地域として新町をあげている⁽³²⁾。前者は現在の JR 大阪環状線内に存在し、近世の大坂の周縁、近代大阪のほぼインナーシティ⁽³³⁾との境界に位置している。そして、後者は上町台地周辺の地名である。

大阪府下に約5万ある稲荷祠のうち1割が狸を祀っているといわれている⁽³⁴⁾。その中でも市内の著名な祠の分布は上町台地とほぼ一致するように南北に広がっている（図3）。

中村は、これらの狸祠は阿波藍商人によって伝承や信仰が大坂にもたらされた結果できたもの

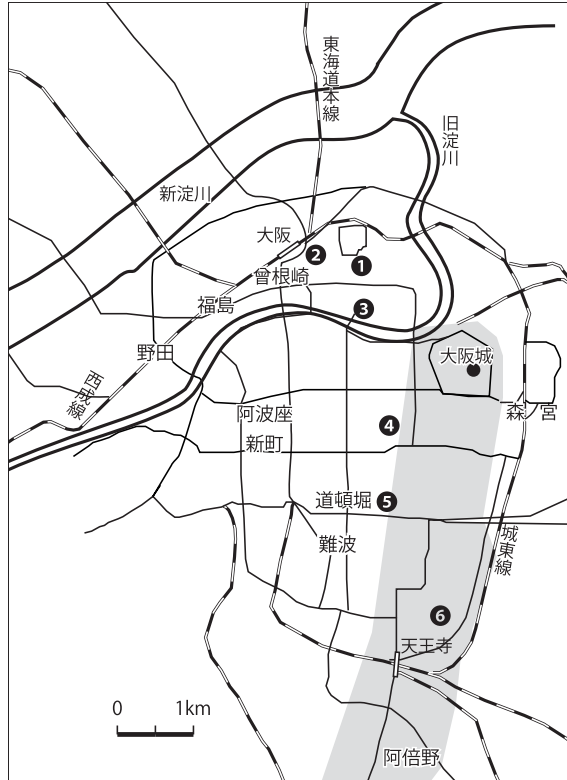


図3 狸話の多い地域と狸祠の分布

- ①榎木神社 ②玉姫稲荷 ③お吉稲荷 ④狸坂大明神 ⑤源九郎稲荷 ⑥初姫大明神
 ■は上町台地

(前掲19, 「大正頃の大阪市」(平岡昭利・野間晴雄編『近畿Ⅱ 地図で読む百年』, 古今書院, 2006)をもとに筆者作成)

であるとしている⁽³⁵⁾。阿波の狸文化が伝播したと思われる根拠としては、次の3つをあげられている。一つは、樹霊信仰との関連である。大阪も徳島と同様に、狸が祀られていた場所が榎などの木の下にあり、このことから樹霊信仰と狸祭祀の習合が考えられる。二つ目は、稲荷または祭神の数字名称。関西で祀られている狸の名称に“八”が多く、また、タヌキを八と呼ぶ習慣は、徳島の狸名に六や八などがつく傾向と関係があるとしている。そして、最後にあげられているのが御神体の種類。関西の狸を祀る稲荷の御神体は、石塚や石像、木札、紙札、鏡、御幣のいずれかであり、徳島の御神体とほぼ一致するのである。

崖・坂地帯が多い上町台地は、古くから神社や寺院、林などが多く、タヌキの生息適地であった。前述の通り、阿波の商人は豊臣の時代から大坂へ移住していたが、特に藍商人たちが進出していたのは新町、阿波座付近である。本稿のⅢ章における金長狸の伝説でみられるように、藍商人は狸信仰や伝承と結びつきを持つ。つまり、彼らによって現在の西区に阿波の狸文化が入り、そこから広がっていく中で、実際にタヌキが生息していた上町台地上に定着していったと推定したい。中村は狸信仰が放射的に広がりを見せたとしており、狸話の多い地域を分布図に落とすと新町や阿波座から放射状に広がっていることがわかる⁽³⁶⁾。以上のことから、阿波藍商人によっ

て阿波の狸文化が伝わり、また大阪の狸文化の基礎が築かれたことが明らかとなった。

しかし、これらの地域をもっと広い視点から共通点を探ることで、他の要因もみえてくる。上町台地の周辺地域と新町には狸話や狸祠などの狸文化が多く存在しているが、前述した通り、これらの地域は豊臣時代に瀬戸内海を通じて外から多くの商人たちが移住した場所でもある。このことから、大坂の中でも他とは性格の異なった地域であったと考えられる。そして、狸文化の成立には、いわゆる異界の特色というものが深く関係しているのではないだろうか。この考えを軸にして、次に新町と狸文化についてみていきたいと思う。

(3) 異界・新町と狸文化

大阪の狸文化を考えるうえで非常に重要な地域である新町には“狸横町”と呼ばれる場所が存在していた。新町南通2丁目から新町通りにでる一角の間、現在の新町西口から1丁東の筋をそう呼んでいたが、現在の地図上で確認できる町名ではない。狸が棲んでいたことや白首の狸が廓のあたりをうろついていたところからできたと思われる通称である。狸横町には、六兵衛狸という狸が小座敷を覗いたり、お屋敷帰りの芸妓にちょっかいをかけたりする話が伝わっている⁽³⁷⁾。

この話からもわかる通り、狸横町があったところを含め、現在の新町1丁目から2丁目にかけての場所には新町遊郭が存在していた。江戸で吉原遊郭が認許された1617(元和3)年、木村又次郎が遊女町づくりの申請を官許されたことから新町遊郭の歴史は始まる。その頃の大坂は、大阪城再建のために武士が集められたことにより男中心の社会となっていた。傾城買いの需要が増え、遊女町が各所に存在していた。民家の中に散在している状況は町の風紀や治安上好ましくないため、まだ未開発の湿地であった新町を開いて、そこに集団移住をさせていった。

1627(寛永4)年、まずは天満で傾城屋をしていた佐渡島勘右衛門が上博労町の遊女を引き連れ「佐渡島町」を、次に申請が許可されていた木村屋又次郎が伏見町4~5丁目にあった遊女屋を率いて「瓢箪町(又次郎町とも)」をつくった。さらに、江口の色里から移ってきた佐渡島の実弟である越後屋太兵衛が佐渡島町の続きに「越後町」を、阿波座からは「四郎兵衛町(のちの新京橋町)」を、福島逆櫓の松付近の新堀からは「金右衛門町(のちの新堀町)」を、天満葎原からは「吉原町(裏新町)」をそれぞれつくった。余地に高麗橋通りに住んでいた佐渡屋忠兵衛が「佐渡屋町」を、そして玉造の九軒茶屋が移ってきて「九軒町」ができ、こうして新町遊郭は大坂の各地から遊女を集めて形成されていった⁽³⁸⁾。

幕府の公認で遊女屋を集めた堀に囲まれた場所を廓という。「くる」はまわる、「わ」は曲がりとり囲む場所を意味し、周囲と区別するために設けられた囲いからできた言葉である。新町も幕府公認でつくられた場所であるため、東には堀が、西には人家と隔てる街路が、南北には民家と隔てる溝があり、他の空間と区別されていた。

さて、新町遊郭に狸話が数多く存在しているのはなぜなのだろうか。新町は遊郭ができるまでは野原であったことから、タヌキが生息していて頻繁に目撃されていたことが理由として考えられ、そのことから本稿のⅡ章で触れた月のイメージとも重なりあう。

また、遊郭などのいわゆる女の商売と狸には関連があると以前からいわれている。玉井葵は松山の「正安寺狸」と札幌の狸小路商店街を例にあげ、戦前の松山で最も栄えた歓楽街であった正安寺横町に狸がいたということに白粉をした狸の匂いを感じるとしている⁽³⁹⁾。

これらの場所と狸を考えるうえで、まずは狸話ができるメカニズムを押さえておかなければならない。狸話は化かされもの、騙されものが代表的であるが、これらは自分の体験談を話すときの誇張や自分の失敗談、または話せない事実を狸に責任転嫁することで生まれる。また、人は理解不可能な現象と遭遇したときに狸や狐のしわざだと思うように、化かされたと考えるのは女性ことに老人が多く、次いで成人男性でやや神経の鈍い人、酒に酔った人などがあげられる⁽⁴⁰⁾。遊郭などでは女性はもちろんのこと、酒に酔った男性も多く、またそういった場所に行ったことを隠すための言い訳としても狸話はつくられていったのではないだろうか。

しかし、本当にそれだけなのだろうか。私は、そこに“異界”という存在が深く関係していると考えている。新町の形成をみればわかる通り、遊郭というのは普通の生活世界から区切られた場所、いわゆる異界である。遊郭は壁などで物理的に隔てられてはいなくとも、心的イメージとして普段生活しているところとは別の領域、特別な空間といえる。そして、この異界という特異な場所では、通常起こらないことが起こるという考えが、狸話ができる根本にあるのではないだろうか。

異界という考えとともに押さえておきたいのは、その内外にいる人の存在である。遊郭の利用客には、阿波をはじめとした四国の商人などもおり、そういった外から来た人たちにより内側で狸文化が広められ、人によって狸話などで外へと拡大していったと考えられる。また同様に、客ではなく店側の人間によっても広められたとも思われる。遊郭は複数の遊女屋が集められた場所であり、例えば前述したとおり、新町遊郭の場合には、阿波や佐渡⁽⁴¹⁾など狸文化の盛んな地域と関係のある名前がみられる。新町の狸話には、遊女たち店側の人間が狸になったものと、客側が狸となったものがあることから、異界で生活し、異界で遊ぶ人たちによって狸話がつくられたことがわかる。さらに異界を行き来しない人たちによって外からみたイメージが狸話となって増幅され、その数を増やしていったと推察できないだろうか。つまり、狸文化はタヌキが生息している、知っているという自然的要因、異界という場所的要因、そして何より人の動きによって生まれ、伝わり、拡がっていくものなのである。

(4) 狸文化と芝居の道

これまで、阿波藍商人によって伝播した狸祠や遊郭と狸文化の関係性について考えてきたが、共通することはやはり、外部から大坂にきた商人の存在である。他の地域へ出ていく商人たちが自分たちの持つ狸文化を伝える役割を担っていることはうなずける。しかし、狸文化をつなげるルートというのは、他に存在しないのだろうか。

大阪には「芝右衛門狸」の伝承がある。淡路国の洲本に芝右衛門という芝居好きの狸がおり、侍に化けて道頓堀にあった中座へ芝居を見に通っていたところ、正体がばれて番犬に殺されてしまう。その後、中座の客の入りが悪くなり、芝右衛門の祟りのせいだと考えられた。そこで中座

の中に祠を建てて祀ったところ、以前のように大勢でにぎわうようになった。以来、商売繁盛、人気や芝居の神様とされているという。中座には戦前から祀られている八兵衛大明神が存在するが、これが芝右衛門狸の分霊を勧請した祠である。中座の舞台上がる際には、役者が技芸上達と無事に舞台を勤められるように祈願するという習わしが伝わっている⁽⁴²⁾。

芝右衛門狸の故郷である淡路島の洲本にも、漢字は異なるが「柴右衛門」という狸が三熊山に住んでおり、大阪の道頓堀へ芝居見物に出かけた話などが残っている。現在、洲本八幡神社の境内社には人気の神、芝居の神、商売繁盛の神として柴右衛門大明神が祀られている。この社殿は1902（昭和37）年9月に、片岡仁左衛門をはじめとした歌舞伎一座の役者や渋谷天外、藤山寛美などの松竹新喜劇の役者、そして中座関係者の寄付によって建てられたものである。元の鎮座地は、現社殿より15mほど離れた楠の根本にあった祠で、その根元から1m上の幹には狸の住処に適した空洞も存在していた。

田野登は、洲本から伝わった柴右衛門狸が、大阪で芝右衛門として役者たちから信仰される中で変化して広がり、洲本へ逆輸入されたと推測している⁽⁴³⁾。また、大森恵子は淡路島で狸神を稲荷神として祀る背景に、阿波、讃岐で分布する狸神信仰が大きな影響を与えたと推定している⁽⁴⁴⁾。これについては、阿波国と淡路国が明治維新後の1876年に徳島県と兵庫県に分属するまで、ともに蜂須賀氏が統治する徳島藩であったことを踏まえると、十分に考えられることである。

さらに、注目すべきことに、阿波にも「先山の柴右衛門」という伝承が存在する。徳島の勢見山の麓にある観音寺の境内で犬芝居が行われ、それを見物に来た淡州先山の柴右衛門という狸が犬に殺されてしまうという話で、大阪に伝わる伝承と似通っている。

以上のことから、「阿波への道」という語源の通りに、淡路を間に挟んだ阿波と大阪を結ぶ一つのルートが浮かび上がってくる。芝右衛門狸の伝承に共通することは、シバエモンという名前と芝居好きということであるが、狸伝承のほかにこの3つの地域を結ぶ文化としては「人形浄瑠璃」があげられる。人形操作をみせる人形操りと語り物の浄瑠璃が合体した人形浄瑠璃は、16世紀末の慶長年間に京都で始まったとされている。それが、大坂や西宮などを経由して、まずは淡路の人形操りの集団である人形座へと伝わる。淡路では最盛期に40を超える座が存在するほどに発展し、歴代藩主の庇護・奨励もあって、阿波にも普及していったのである。伝承の中の地域的な拡大は、もともと何らかの関係性が存在していたからこそ可能となる。芝右衛門狸の場合はこの人形浄瑠璃の伝播が背景にあり、また大坂・阿波それぞれの地域で芝居が発展を遂げたからであると考えられる。また、狸文化は人や文化などの交流によって複雑に成長・増幅するため、それが地域に及ぼす影響は必ずしも一方方向にはならないといえる。

V. 木更津

(1) 近世の木更津

徳川家康は関東に入部したのちに江戸市街の整備を行い、増加する食料需要に対応するため、

摂津国や紀伊国、伊勢国などの関西漁民の出漁や移住を推進した。それにより先進的な技術が関東周辺に伝わり、漁業が目覚ましい発展を遂げていくこととなる。下総国の銚子周辺には、紀州を中心とした漁業移民が多く来住した。銚子港は、東北地方の廻米を除いた商荷物を扱う気仙問屋の倉庫や船宿などが連なる商港へと姿を変える。さらに紀州移民がもたらした醤油製造業や魚肥をはじめとする水産加工などによって、食料品製造業の拠点へと成長していった⁽⁴⁵⁾。銚子と同様に、房総半島では関西漁民の進出によって鰯漁などの漁業が各地に展開していった。

上総国望陀郡木更津村は、海上交通において重要な“湊”として発展していった。干潮になると干潟が露出して接岸できないという、あまり恵まれない内湾環境であったが、五大力船と呼ばれる木更津船には“3つの特権”が存在した。この特権というのは、1614（慶長9）年の大坂冬の陣で木更津村から動員された24名の水主^{かみ}の半数以上が死亡したため、その救済措置として与えられたものである。特権内容は、一つ目が木更津近辺二万石の年貢米の輸送権であり、二つ目が江戸舟町（現在の東京都中央区日本橋）の専用の船着場・荷揚場である「木更津河岸」の占有権⁽⁴⁶⁾である。そして三つ目は、安房・上総への往来者の乗船権である。

上総や安房から東海道を西行する人の大多数は、木更津湊から木更津船を利用し、神奈川湊の沖合で風待ちをしたのちに、舩船に乗り換えて神奈川湊へ行くルートをとっていた。また、物資輸送は江戸向けが中心であったが、神奈川湊や浦賀などの江戸湾沿岸にある湊にいったん入港し、荷揚や荷請をすることもあった。以上のことから、木更津湊は、西上総や安房国の一部などの広範囲の地域と江戸や神奈川、浦賀などを結ぶ物資流通において大きな役割を担っていたことがわかる。

木更津の海岸線近くでは、房総南部を代表する街道である房総往還がほぼ南北に通っていた。村内では3つの道に分かれており、木更津湊に接する海岸通りは、北から北片町、中片町、南片町に区分されていた。北片町と南片町はそれぞれ北組、南組といわれ、北組の船着場である「北河岸」と南組の船着場である「南河岸」には木更津船が発着していた。一方、中片町の船着場である「魚河岸」には漁船が着岸し、魚介類が水揚げされていたという。木更津村は、近世中期には940軒ほどになる。また、木更津船の船持は、北組、南組ともに10名ずつ、船数は北組14艘、南組12艘であった⁽⁴⁷⁾。つまり、木更津には3つの船着場が存在し、中片町は漁村的性格を有していた。

木更津が湊として発展を遂げていくことにより、村にはそれまでに存在しなかった文化が入り込み、変容を遂げていく。その代表的な存在として、次に證誠寺をとりあげる。

(2) 證誠寺

江戸時代の木更津は「寺町」と呼ばれるほど、寺が多かった。日蓮宗の光明寺をはじめとして、寺町通りには八幡宮別当泉蔵寺や光徳寺、宝光寺、長音寺、持宝院、八幡山座主東善寺などの真言宗寺院が軒を連ねている。また、北の突き当りには浄土宗の撰擇寺が、その裏には東岸寺があり、西側には塗師屋や花屋、石屋、料理屋などの仏事に関係する店が並んでいた⁽⁴⁸⁾。

そのような環境の中で、證誠寺は村はずれのさらに南に存在する、木更津唯一の浄土真宗寺院

である。證誠寺は、慶安年間（1648～51）に相模国からやってきた了念によって創建されたが、これには関西からの移住者が深く関係している。というのも、木更津が湊として発展したことにより増加した移住者の大多数が浄土真宗を信仰していたからである。門徒となった移住者は香々見家、河田家、岸本家、半田家などで、彼らは四国、関西、北陸から木更津に移住してきた一団である。移住者には、商人も多かった⁽⁴⁹⁾。移住商人たちは南町に集住しており、このことから證誠寺が湊として発展したからこそ、誕生したものであるといえる。

了念の時代は熱心な布教活動の甲斐もあり、久留里村や蔵波村、中島村、泉村、富津村、飯野村など、木更津の周縁にも門徒が数多くいた。木更津村での最初の門徒は移住商人たちである。二代目了圓と三代目了教の時代になると門徒数も増え、地域との接触が多くなっていく。證誠寺が地域に受け入れられ、現在のように木更津の一部になるまでにはある程度の年月があり、水面に投げられた石が波紋をつくり拡散していくように、木更津の中で変化を生じさせ、新たな文化を生み出していったのである。その一つが、證誠寺のたぬきばやし伝説である。

(3) 證誠寺のたぬきばやし

證誠寺に伝わるたぬきばやし伝説は、野口雨情作詞の「証誠寺のたぬきばやし」⁽⁵⁰⁾として全国に知られているが、それが木更津に実在する寺がモデルになっていることはあまり知られていない。證誠寺のたぬきばやし伝説は以下の通りである。

木更津の証誠寺は昼までもうす暗い大きな寺で、そこの和尚は大変な学者であり、また三味線が好きであった。ある秋のこと、庭のほうからザワザワと騒ぎ声が聞こえ、不思議に思った和尚は騒ぎのするほうを覗いてみると、狸たちが100匹近く並んで調子をそろえて自分の腹をたたいたり、アシの葉の笛を吹いたり、面白い恰好で踊り狂っていた。やがて、狸たちは「証誠院のペンベコペン おいらの 友だちゃ ドンドコドン」と唄いだす。浮かれだした和尚さんは狸たちの中に入っていき、歌や踊りを競い始め、それが3日間毎晩続きました。しかし、4日目の夜に狸たちが現れず、翌日本堂のまわりを見て回ったところ、音頭をとっていた大狸がやぶれた大太鼓のまま横たわっていたという。

村はずれにある證誠寺は、鬱蒼と茂る「鈴ヶ森」に周辺を囲まれていた⁽⁵¹⁾。そして、これらの環境立地的要因に加え、木更津では聴きなれない浄土真宗の雅楽を用いた法要が加わり、たぬきばやし伝説は誕生したのだといわれている。

また、伝説に登場する和尚は五代目了因であると考えられている。その根拠としては、證誠寺が寺子屋として繁盛し、了因自身が師匠として尊敬されていたことと、彼が住職であった1797年に五昼夜連続の雅楽演奏による法要が行われたことがあげられる。法要は通常1～3日で行われるため、5日は極めて異例なことである。また、境内には芝居小屋や見世物、商店などが立ち並び、房総地区の本派寺院の住職が6人泊まり込みで参加したという当時の様子からも、非常に大規模であったことがうかがえる。以上のことから、たぬきばやし伝説は了因の時代、もしくはそれ以降に誕生したと思われる⁽⁵²⁾。

しかし、果たして、この通説は妥当なものであろうか。たぬきばやし伝説は、和尚と狸たちが

3日3晩唄い踊る話であり、狸は人を化かすこともなければいたずらもしない。この3日を法要だとすると、和尚と一緒に歌い踊る存在は誰にあたるのだろうか。

私は、この狸たちが證誠寺の門徒ではないかと考えている。門徒なら和尚とともに法要を行うし、他の寺から応援に来た住職たちは和尚と同じ僧籍の人間であるから、狸とは表現しないだろう。ただ、了念の時代には、移住者たちは村にある程度受け入れられた状態であり、證誠寺が誕生してから100年近くたっているため、この時代に伝説がつくられたとするには疑問を感じる。了念の時代より前の、證誠寺が建設された移住商人たちが木更津最初の門徒となった時代に、たぬきばやしの伝説のもとになった噂というべき“原典”が誕生したのではないかと私は推定している。

そして、ここで押さえておきたいのが移住商人のことである。前述した中で少なくとも香々見家、河田家、半田家は阿波から移住した藍商人であることがわかっている。彼らが日ごろから阿波の狸話をしていたならば、門徒たちを狸と言いあらわしたのも納得できる。こうした移住商人の存在が結果的に木更津で狸文化を生み出したのではないだろうか。

移住してきた商人とそれにより誕生した證誠寺は、木更津の村はずれの南にある種の異界をつくり、たぬきばやしの伝説という新たな狸文化を創り出した。この異界は木更津でどのように変容し、現在の姿になったのかを次にみていく。

(4) 木更津の狸文化の変遷

まず、木更津の狸文化の根本となった有力な移住商人たちが、前述の通り、門前の南町に軒を連ねており、その多くが證誠寺の門徒であった。中でも、阿波国大津村から移住した香々見氏、香々見氏とともに移住してきた河田氏、阿波国半田村から移住した半田氏が木更津の町形成の中核を担っていく。かれらはそれぞれ、「大津屋（大儀）」「大津屋」「池北屋」という商号を持つ藍商人であり、阿波徳島産の藍をはじめ、染物、煙草、畳表、雨傘などを手広く扱っていた。彼ら以外の藍商人についても記述があり、木更津湊はその特異性から、阿波藍商人たちの関東進出の拠点の一つになっていたといえる。その後、五代目香々見儀助は1898（明治31）年から10年間、木更津町長を務めて木更津の発展に寄与し、現在も木更津高校前に胸像が建立されている。

一方、たぬきばやし伝説は、門徒である松本斗吟によって1905（明治38）年に郷土出版物『君不去』にて「證城寺の狸囃子」として発表される。次いで、1922（大正11）年創刊の児童文集『きさらつ』にも「證城寺伝説 狸囃」として童詩が掲載された。大正末期、木更津へ講義に来た野口雨情がこの伝説を知り、その後「証城寺のたぬきばやし」を作詞して全国に知られるようになって現在では、日本三大狸伝説の一つにも数えられている。

これら一連の動きにより、證誠寺に何も由縁のものがないのはおかしいという町民の声を集結して、1929（昭和4）年に郷土研究家の河田陽ら町盛年会の尽力によって、境内に「狸塚」がつけられた。石の表面には、狸庵と号した当時の商工大臣中橋徳五郎により、狸の一文字が書かれている。9月13日に行われた塚開きでは、境内や参道に万燈が灯り、屋台の上では子どもたちが狸囃子の舞踏などを披露した。それ以来、現在でも毎年10月に狸まつりとして継続されてお

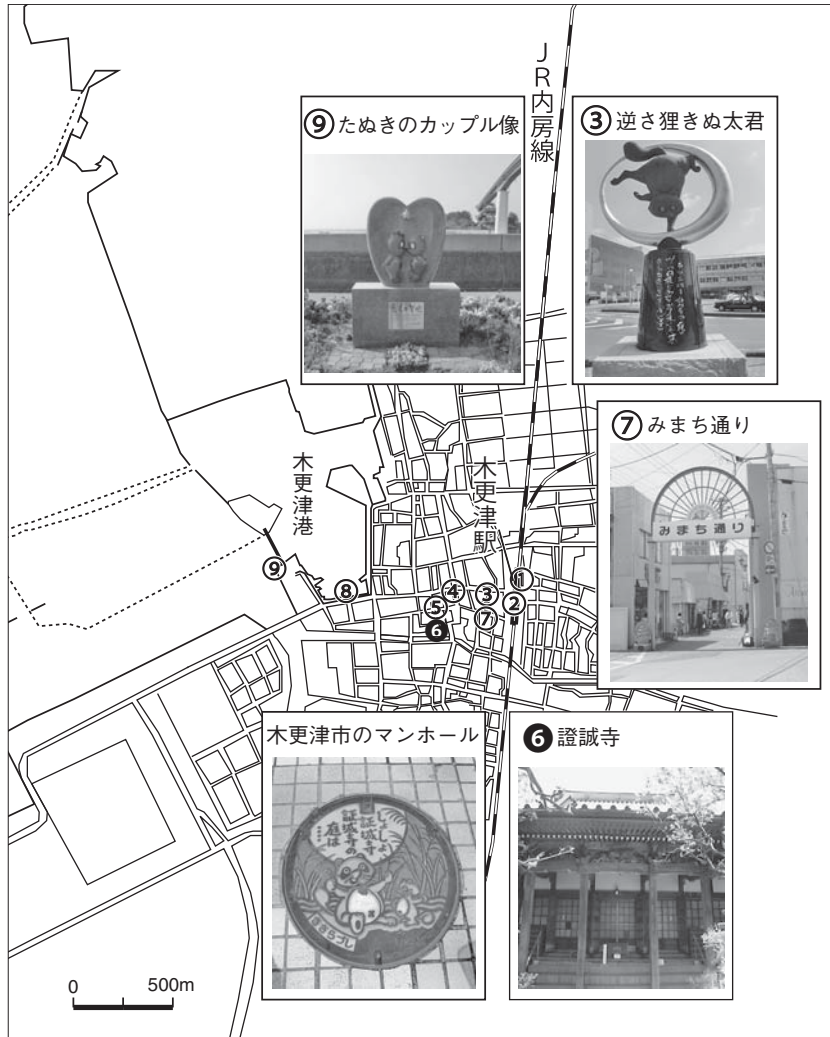


図4 木更津たぬきマップ

①木更津駅の発車予告ベル ②駅前広場のたぬき像 ③逆さ狸きぬ太君 ④富士見通りのたぬき像 ⑤栄太楼 ⑥證誠寺 ⑦みまち通り ⑧港のたぬき像 ⑨たぬきのカップル像
 (写真は筆者が2012年4月24日に撮影)

り、木更津市の観光パンフレットにも掲載されている。

1956(昭和31)年には童謡碑が建てられる。寺にたぬきばやしの要素が増えているなか、近年では木更津のまちづくりにも狸が使われ始めている。市のホームページには、「みなとまち木更津」のまちなか狸として、町の要所要所につくられた石像などが紹介されている(図4)。これらの石像はコストを抑えるために墓石屋の仲介もあって中国福建省でつくられた。当初の町おこし計画では、駅から證誠寺までを石像で結ぶ予定であったが、そのためには40~50体必要であった。しかし、予算面などの関係で個数を減らし、現在のようなかたちとなった。寺院の多くある木更津の中で證誠寺が唯一の浄土真宗寺院であったことも、計画変更の要因の一つとなった

ともいわれている。

木更津のたぬきばやし伝説は、その要因となった移住商人たちが力を持っていく中で育まれ、木更津の郷土研究家である松本斗吟や河田陽をはじめとした門徒の動きによって目にみえるかたちへと進化させられていき、現在では木更津の文化の一部として発信されている。この一連の流れは、地域に入り込んだ異分子が新たな文化を生み出しながら溶け込んでいった動きでもある。狸は「よそ者の文化」から、木更津の町のシンボルへと変化を遂げていった。

しかし、押さえておかなければならないのは、狸はあくまでも木更津を構成する要素の一つだということだ。観光案内でも「伝説とロマンのまち」となっており、決して「たぬきのまち」ではない。このことから、異界で誕生する狸文化はそこに溶け込むことはあっても、地域全体を飲み込むほどにはまだ育っていないといえる。そして、その成長を阻むのもまた、狸文化の根本にある「異文化であること」なのである。

VI. おわりに

本稿では、近世以降の阿波藍商人の動向を追いかけながら、阿波、大阪、木更津における狸文化について藍商人と関連づけて考察してきた。

阿波、大阪、木更津の狸文化には、いくつかの共通点がみうけられる。一つは“異界”である。大阪では阿波座や新町をはじめとした西区、木更津では移住者が住む南町がその地域での異界にあたり、そこからローカルな狸文化が発信されていった。阿波も本州とは切り離された四国という地域であり、また狸文化が隆盛した地域としても、日本の中では異界だともいえる。阿波という地域で誕生した狸文化は、おなじくここで誕生した阿波藍を商う人たちと結び付くこととなる。阿波藍商人たちによって、阿波から他地域へと広められたのである。また、彼らの文化や動向が地域に残っているのは、阿波藍隆盛が一時代を築いたことにより、藍商人たちの影響力は小さからざるものがあつたからであろう⁽⁵³⁾。今回は藍商人と狸文化を取りあげたが、彼らが他地域へと伝播させたものは他にも存在するのではないだろうか。

阿波から伝播した狸文化は、大阪と木更津において、現在異なる様相をみせている。大阪では、阿波藍商人たち以外にも全国から人やモノ、カネが集まった。狸文化は外から来た大勢の一つとして受け入れられたため、大阪の中で溶け込み埋もれた存在となった。一方、木更津では異界と呼べる場所が南町のみであったため⁽⁵⁴⁾、地域の中で特異な存在として入り込み、観光などまちづくりにも利用されている。この二つの事例から、伝播した狸文化は地域に受け入れられるが、その地域の文化の中心、核心にはならないといえる。

阿波、大阪、木更津で狸文化が大きく動いたのは江戸時代である。タヌキのイメージは近世中期を境にして、おおむね凶悪から滑稽・愚鈍へと変化した⁽⁵⁵⁾。また、歌川国芳の戯画をはじめとして、江戸時代には狸が多く描かれている。物語というものは、人々が安定しているときに生まれるのではないかという説がある⁽⁵⁶⁾。太平の世といわれる江戸時代だからこそ、阿波藍商人や絵師たちによって狸文化は伝播し、また変化した。そして、人々の狸に対する共通した認識が

広まっていったのである。

狸はみえないものであると冒頭に記したが、狸文化の要因を地域の中で見ることにより、それを多少なりとも可視的な存在として明らかにできたかと思う。なぜなら、狸文化にはタヌキの分布という内的要因以外に大きな外在的要因の存在が大きい。それは異界であり、阿波藍商人たちであり、その生起した時代である。そして、すべての根源となったのは、異界という認識を持ち、文化を伝え、時代をつくった“人”である。以上のことから、狸文化は人が交流することによってつくられた民俗文化であるといえる。

現在、江戸時代のように狸文化が隆盛することはないだろう。便利すぎる時代では、みえないものへの認識が変化し、もはや多くの人が狸話を信じることはない。しかし、木更津のように狸をまちおこしに利用するなど、狸文化は現在でも決して消えたわけではない。狸文化は江戸時代とはまた違うかたちで、変化を遂げているのである。

[付記]

本稿は、2012年度関西大学文学部卒業論文「阿波、大阪、木更津における狸文化の伝播とその関係性」を改稿改題したものである。

本稿を作成するにあたり、熱心に御指導いただいた野間晴雄先生に深く感謝いたします。そして、関西大学文学部の森隆男先生にも心よりお礼申し上げます。狸のイメージの面では、長谷洋一先生からも助言をいただきました。木更津では、證誠寺や木更津市立図書館、ササキスタジオにお世話になりました。また、数多くの方からいただいた意見、助言を執筆するうえで参考にさせていただきました。この場をかりて深くお礼申し上げます。

注

- (1) タヌキとアナグマの混同については本稿のⅡ章で触れる。ちなみに、タヌキが禁猟となっていた時代には猟師がタヌキを殺したのか、ムジナ（アナグマ）を殺したのかで裁判にまで発展したこともある。
- (2) 千葉徳爾『オオカミはなぜ消えたか』、新人物往来社、1995。
- (3) 高橋春成『野生動物と野生化家畜』、大明堂、1995。
- (4) 中村禎里『狸とその世界』、朝日新聞社、1990、64頁。
- (5) 小松和彦『異界と日本人－絵物語の想像力－』、角川書店、2003、10-15頁。
- (6) 徳島県立博物館編『天下の台所大坂と徳島－江戸時代の交流史』、徳島県立博物館、2013。
- (7) 夏目琢史『アジールの日本史』、同成社、2009では、アジールを「犯罪者がひとたびその中に入り込むと、それ以上その罪を責めることができなくなる空間」と定義している。また、この定義は犯罪者に絞り込んだもので、従来よりも狭い考えだとも述べている。
- (8) 山田奨治「みえる狐、みえない狸 計量妖怪学の第一歩」(小松和彦編『日本人の異界観』、せりか書房、2006) 67-82頁。
- (9) 芦田正次郎『動物信仰事典』、北辰堂、1999、127頁。
- (10) 他にも、英語ではタヌキのことを *raccoon dog* というが、これはアライグマのようなイヌという意味である。
- (11) 月と狸が描かれている、または関係する絵としては、鳥山石燕の狸（『画図百鬼夜行』）や曾我蕭白の月下狸図などがあげられる。また、証誠寺のためきばやしには「ツ ツ 月夜だ みんな出て こい こい こい」という歌詞がある。
- (12) 徳川宗賢・真田信治『新・方言学を学ぶ人のために』、世界思想社、1991、45頁。

- (13) 前掲(4) 209-252 頁。
- (14) 表 1 には含んでいないが、今泉忠明『狐狸学入門』、講談社、1994、55-56 頁によると、アイヌではタヌキのことを「モユク」と呼ぶ。意味は小さな、または弱い獣。また、名寄や屈斜路ではタヌキ神「モユク カムイ」であり、キツネを神とする伝承のない十勝や釧路、北見地方では、クマの叔父さん「キムンカムイ ケウシュツ」あるいは叔母さんであるという。このことから、キツネになじみのない地域では、タヌキの地位があがるといえる。
- (15) 表 1 の中の「とんちぼー」は、佐渡でムジナのことを指す。しかし、前掲(4) 35 頁によると、佐渡にキツネやアナグマの分布がなく、佐渡のムジナはタヌキであるという。
- (16) 狸と穴に関係するものとしては、方言名のほかにも「狸穴」をはじめとした地名や「狸掘り」という採掘方法もある。
- (17) 日野巖『動物妖怪譚 上』、中央公論新社、2006、28-29 頁。
- (18) キツネの生息区画については <http://www.env.go.jp/houdou/gazou/5533/6252/2143.pdf> を、タヌキの生息区画については <http://www.env.go.jp/houdou/gazou/5533/6252/2144.pdf> をそれぞれ参考とした。
- (19) 本州と四国を結ぶ本州四国連絡橋には 3 ルートあるが、1988 年に児島・坂出ルート(瀬戸大橋)が、1998 年に神戸・鳴門ルートが、1999 年に尾道・今治ルート(瀬戸内しまなみ海道)が開通した。
- (20) 他にも、高度経済成長により棲みかを追われたなどが考えられる。
- (21) 中村禎里『動物たちの日本史』、海鳴社、2008、78-89 頁。
- (22) 笠井新也『阿波の狸の話』、中央公論社、2009 の村上健司の解説によると、その数は 600 とも 700 ともいわれる。山間部よりも平野部、それも都市に集中しているという。
- (23) 金長狸の伝説は、前掲(2)や小松島市のホームページ、中国四国農政局のコラムを参考にしたが、前掲(2)では別説も記載されている。
- (24) 1994 年 7 月 16 日公開のスタジオジブリ制作の劇場アニメ作品。脚本・監督は高畑勲。
- (25) 前掲(2)。
- (26) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 36 徳島』、角川書店、1986。の「津田」の項目を参考とした。
- (27) 竹内淳子『藍-風土が生んだ色-(ものと人間の文化史 65)』、法政大学出版局、1991、34-36 頁。
- (28) 石躍胤央編『徳島・淡路と鳴門海峡 街道の日本史 44』、吉川弘文館、2006、221 頁。
- (29) 山口恵一郎編『日本図誌大系 6 四国』、朝倉書店、1975 にある 1896 (明治 29) 年測量の地形図をみると、吉野川デルタには畑が多く、土地利用は吉野川本支流に沿う微高地との関連が深い。
- (30) 当時の西区は「出船千艘・入船千艘」(撰津名所図会)などと表現されている。諸国から集まった物資は、ここから大坂市中をはじめ、各地へと送られた。なお近代の大坂の開市が誕生した。川口居留地があったのも西区の河川分水点である。
- (31) 阿波藍問屋のほかには、立売堀、西長堀には材木問屋、堀江では松前問屋、西横堀川右岸では瀬戸物問屋が問屋街を形成していた。
- (32) 鬼内仙次『大阪動物誌』、牧羊社、1965、166 頁。
- (33) インナーシティとは、都市の発達した中心地区の周辺に位置し、住宅・商店・工場などが混在する地域のことをいう。ここで筆者が規定する大阪のインナーシティは戦前に形成された市街地のことである。
- (34) 前掲(32) 168 頁。
- (35) 前掲(2) 115-120 頁。
- (36) 前掲(2) 116 頁。しかし、新町や阿波座から放射状に広がった以外の伝播も考えられるので、今後はそれぞれの地域の狸文化を考察していく必要がある。
- (37) 前掲(32)。
- (38) 西六連合振興町会編『西六いまむかし -30 周年記念誌-』、西六連合振興町会、1986、80-81 頁。
- (39) 玉井葵『伊予の狸話』、創風社出版、2004、136-138 頁。

- (40) 前掲(2) 66 頁。
- (41) 前掲(15)のとおり。佐渡には貉祠や伝説などが存在している。
- (42) 現在は撤去されているが、道頓堀の旧中座ビル前には「シバエモン」の立体看板が存在した。
- (43) 田野登「柴右衛門狸伝承の一展開 - 洲本市の観光マチおこしにおける道頓堀中座楽屋話との関連 -」, 日本民俗学 265, 2011, 104-121 頁。
- (44) 大森恵子『稻荷信仰と宗教民俗』, 岩田書院, 1994, 560 頁。
- (45) 千葉県銚子市に本社を持つヤマサ醤油株式会社を興した濱口儀兵衛家は紀州出身である。なお、銚子については石井英也編『景観形成の歴史地理学-関東縁辺の地域特性-』, 二宮書店, 2008 の第IV編 銚子の第1章「港町銚子の機能とその変容過程-とくに興野地区の特徴形成と他国出身者の役割に着目して-」(清水克志・船杉力修・渡辺康代・加藤晴美), 149-172 頁を中心に参考にした。
- (46) 川名登編『房総と江戸湾 街道の日本史 19』, 吉川弘文館, 2003, 85 頁によると、のちに元四日市町(中央区日本橋)に移転した。
- (47) 前掲(46) 86 頁によると、1794(寛政6)年の記録で、船数は時期によって若干の増減がみられたという。
- (48) 高崎繁雄『西上絵歴史もよま話』, 聚海書林, 1992, 196 頁を参照。
- (49) 前掲(48) 196 頁によると、河内屋, 越前屋, 近江屋, 三河屋, 阿波屋, 伊勢平, 伏見屋といった屋号が墓標に刻まれている。また、紀伊国生俗名何某や能登国輪島塗師何某伴, 河内国惣持寺村などの生まれを刻んだものもある。
- (50) 童謡での表記は“証誠寺”である。誠ではなく城を用いた理由については諸説存在している。
- (51) 証誠寺の周りには松が生えていたので、松林だと思われる。
- (52) 前掲(48) 196 頁では、民話が生まれた裏付けとして五昼夜連続法要の記録があげられている。また、井上友治『狸と日本人』, 黎明書房, 1980, 112-116 頁では、了因が歌舞音曲の名手であり、ペンペコパンは了因の三味線の音だと考えられている。
- (53) 大坂では、阿波藍商人をはじめとした移住者によって橋が架けられたが、木更津にも証誠寺橋というのがある。橋を架ける行為は、阿波藍商人の隆盛やたぬきばやしの面から考えると、町の中で権威を知らしめるためのものである。だが、一方で地形や利便性、人の意識的な面から考えると、外との繋がりを求めた結果できたものとも思われる。
- (54) 現在の証誠寺周辺には、ラブホテルや場末の飲み屋、コンドームの自販機などがあり、アジールの要素がみられる。
- (55) 前掲(4) 36 頁。
- (56) 佐々木高弘『民話の地理学』, 古今書院, 2003, 96 頁によると、文芸評論家の辻邦生の考えである。

(ピースおおさか 財団法人大阪国際平和センター)